光琳新撰百圖

上

18 Kori

231

世の中に尾形光琳のもてはやさるゝや
一花一葉まても人是を珍として斎にし
よろこひはさるゝハ久し其後傳と高く残
大皇国乃寛平延喜比乃おもむきとつ
なるをむねとし宋代古雅をやの
ものし人物山水花鳥草木比
奥のそと極め筆墨のたくみ精妙

ひとつく位置ハなるゝを人ハ此みなは
出して世ことまりの古人ハ此跡をふミて古
人の跡をはなるゝ古人乃あとを踏てし
て暗ニ古人ハ意をあへてす昔ハ人
ほへらく平生古人なくて学力をもと
も深く学をふまへ研古人なく
して精心自ら顕るゝことハのこゝろ

をや伊てこゝろむかしおもひ世人の
絵のく雲あつて雅なしてくらなる雅なる
ころさるあり文あつて俗なして宇雅雅
なるへあつてもにこら雅なるさりけはなり
凡て光珠に表裏共ニ雅なりこの事
をもちゐるは静なして楽ニ佳座
わかれ此のしるつ筆をもちゐるなり

是我 皇國につたはる書教 南宗最
第一と言へし我師抱一上人者
に常に畫をかゝれしハ遠きことさへ畫の
國人のことゝ思へるはあやまりて我
皇國ハ武士のくにゝて文武
道ハ言の葉のさかりに國のあはれハ
ことのこゝに住まされともことに國の手毛

まさりなくなれるはくしく其のをしへ孫ハ畫
能するはくましけるは取用ゐやうもの我
奴としてつたへし佐橘光之繼は
卓落不羈なれども常にもとひやハ
羅そのりして強くつましてやはら吟む
國中につめる骨なきものになるへく
自ら大和魂常に人に顕れて識に

志ことに深くして識まで妙境に入ましき
けりとこれを筆に及かたき事しての一つ
御國にかゝる畫の博士ありしかも
活眼好古の人ありしめ傳あるも志ありし
凡畫は鑒定をもとゝしれ賢識ある
されは畫及筋もやうやうかゝる一譜へ
ことありてこれを語りたまひきいとめでたき程ま

しあまねくは志たるまゝ写へあるいは多くし
てかつ法の筆墨の蹟のこるを慕ひ
役ひつまじくを近き年の古畫の道日々
あひるけ月ごとに盛になりて毎に
光琳の手ありて世にもてはやさるゝを
ことに画風の次師のさとしをうけ
ひきいましまりしたまふとくちたん

思ひの外我朝の画より漢の古画
を始めて宋南宗北宗こそ此の名を
癖ありあれハつかふ事もなくものまなひて
見ことん此無数のくさくさ縷をれどもえ
つねはこの法橋か流を志すなれば
此ハ薪のまう二たひ讀きを撰ひあつめ
思そし中なる宿をしきをとりわき我

師のかきのこしおきたるひなかたを
光琳百図となつけ光琳新撰百
図となつけ二まきとなし
桜木のおもかけをうつせむ事を
世にあらはしなむおもふ
あまねくなつかしやその門を
あさまうて教へ子此筆に任せて

縮本淡彩

けふも寿しおしとてちらん

元治と改りぬる甲子の年

張郡藤原之信 喬松軒

於南窓乃もとにてのぶる

絹本墨画

絹本淡彩

絹本彩色
太公望

紙本彩色
秋好中宮之侍女
横山氏蔵

紙本淡墨

紙本金銀泥

舊松軒藏

紙本彩色

絹本彩色　小町　伊勢　二幅対

絹本彩色

紙本三幅対淡彩

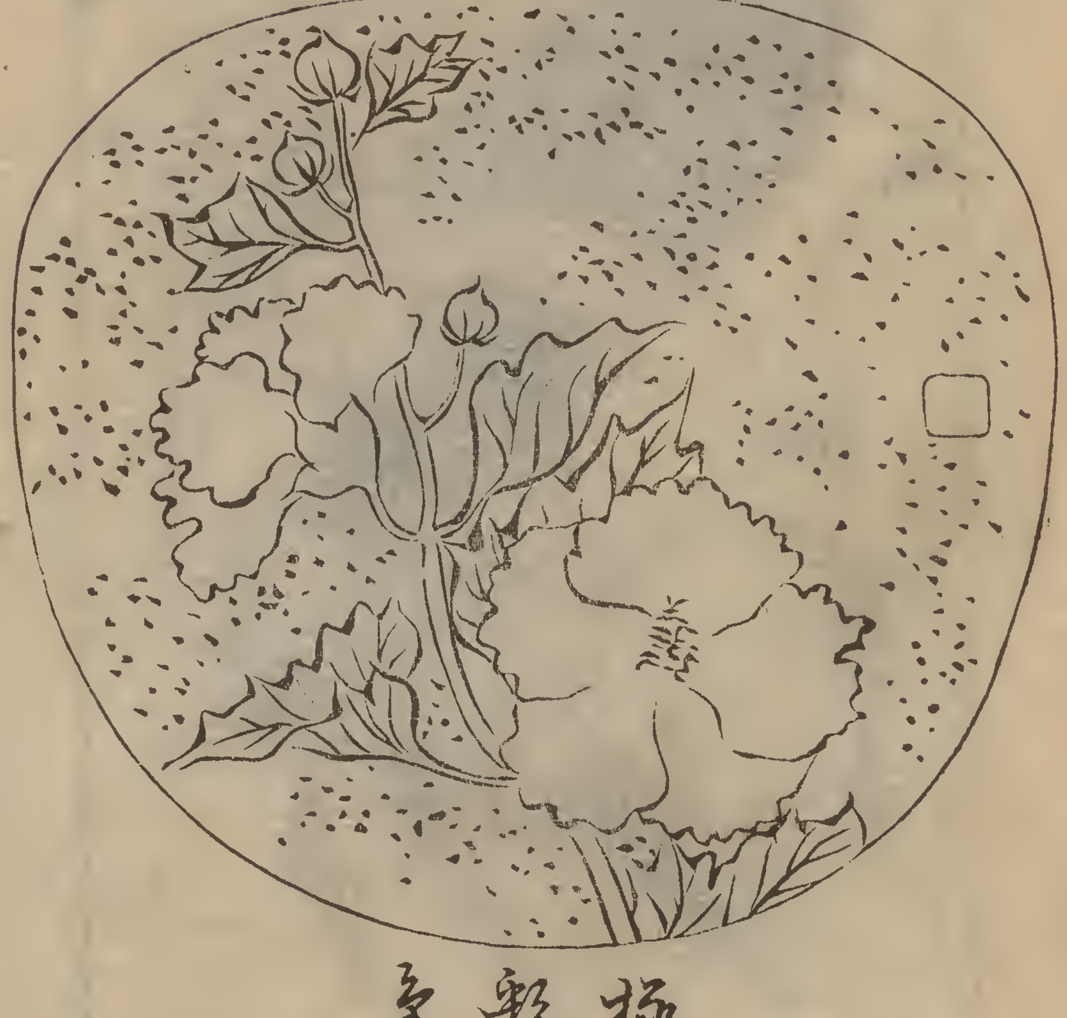
金地
団扇

極彩色

金地

同

金砂子



極彩色

金地

同

金泥ぬりほかし
墨画

金泥引

同

金泥引

墨画

泥引

同

金泥
ぬりほ

墨画

泥引

淡墨

泥引

同

同

同

金地

極彩色

天地 金
中 青金
銀

極彩色

[illegible]

金地二枚折屏風伊勢物語極彩色

伊勢物かたり
扇面三枚彩色

綃本墨画三笑

舊松軒蔵

綃本淡彩蜆子蒿山

菅公縁起扇面
三枚影写

絹本波ニ月画

不争庵蔵

絹本福禄寿

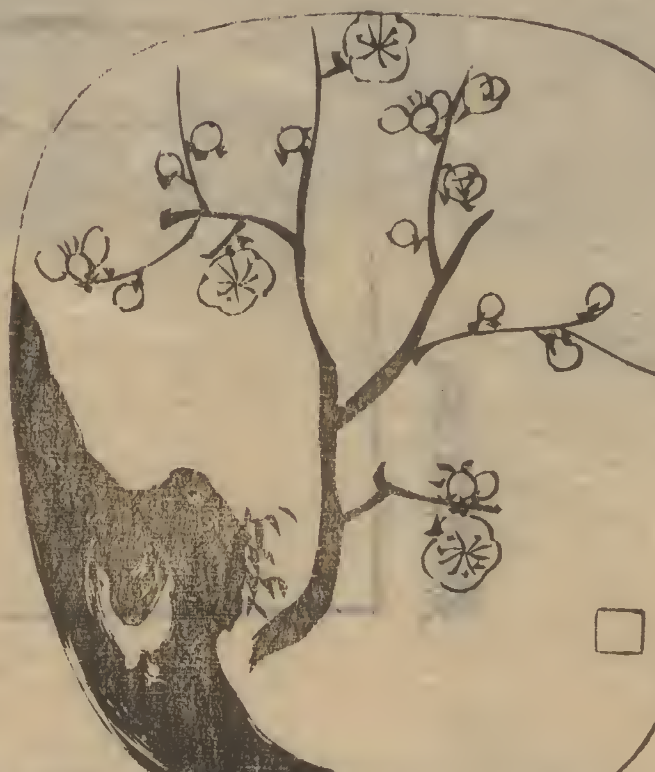
紙本
淡墨

舊松軒藏

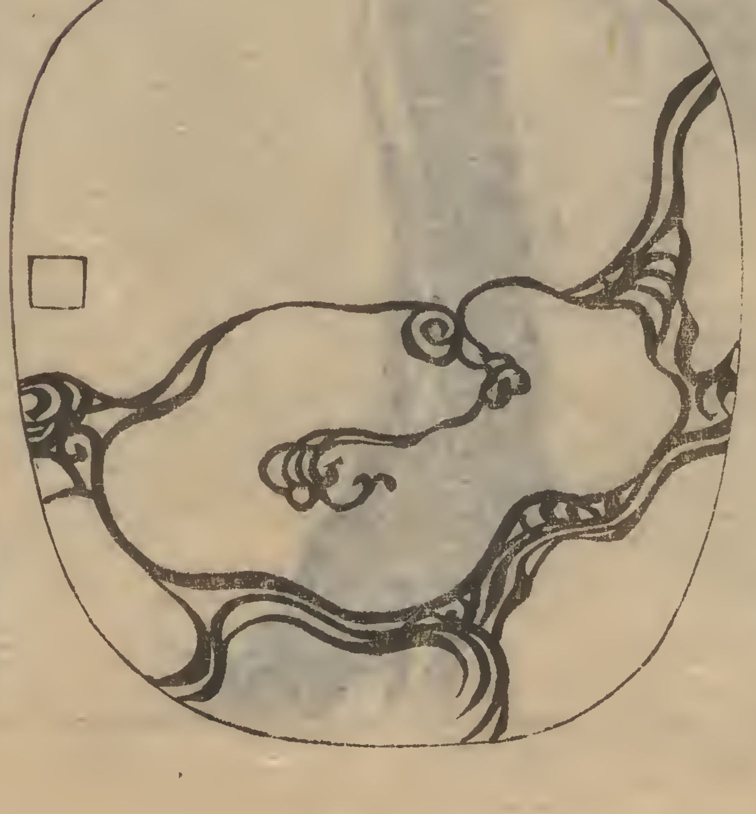
紙本淡彩

本紙

團扇六枚
白地泥引

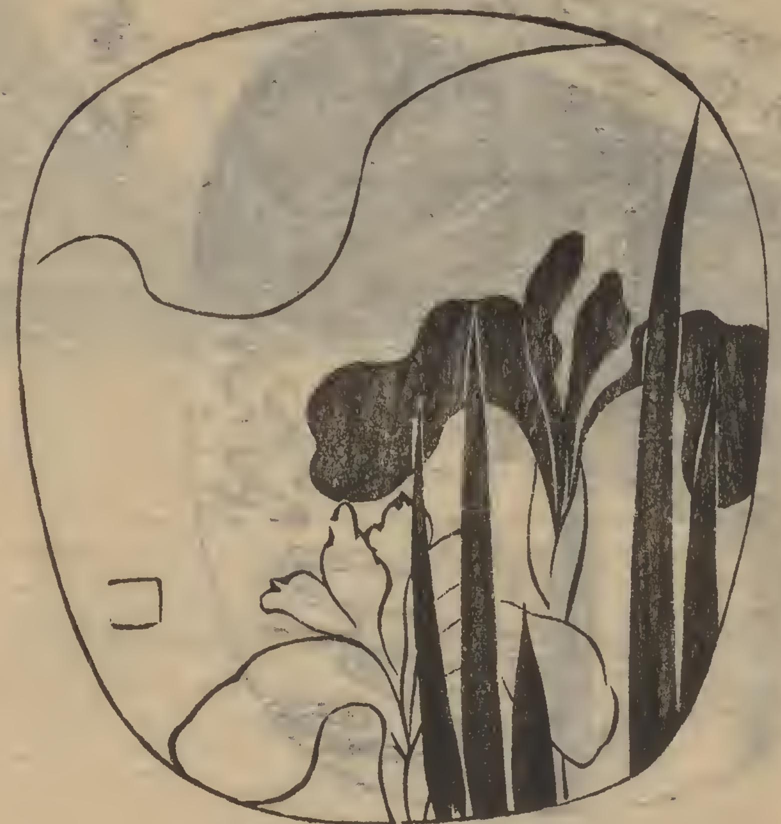


金地
波群青



同右

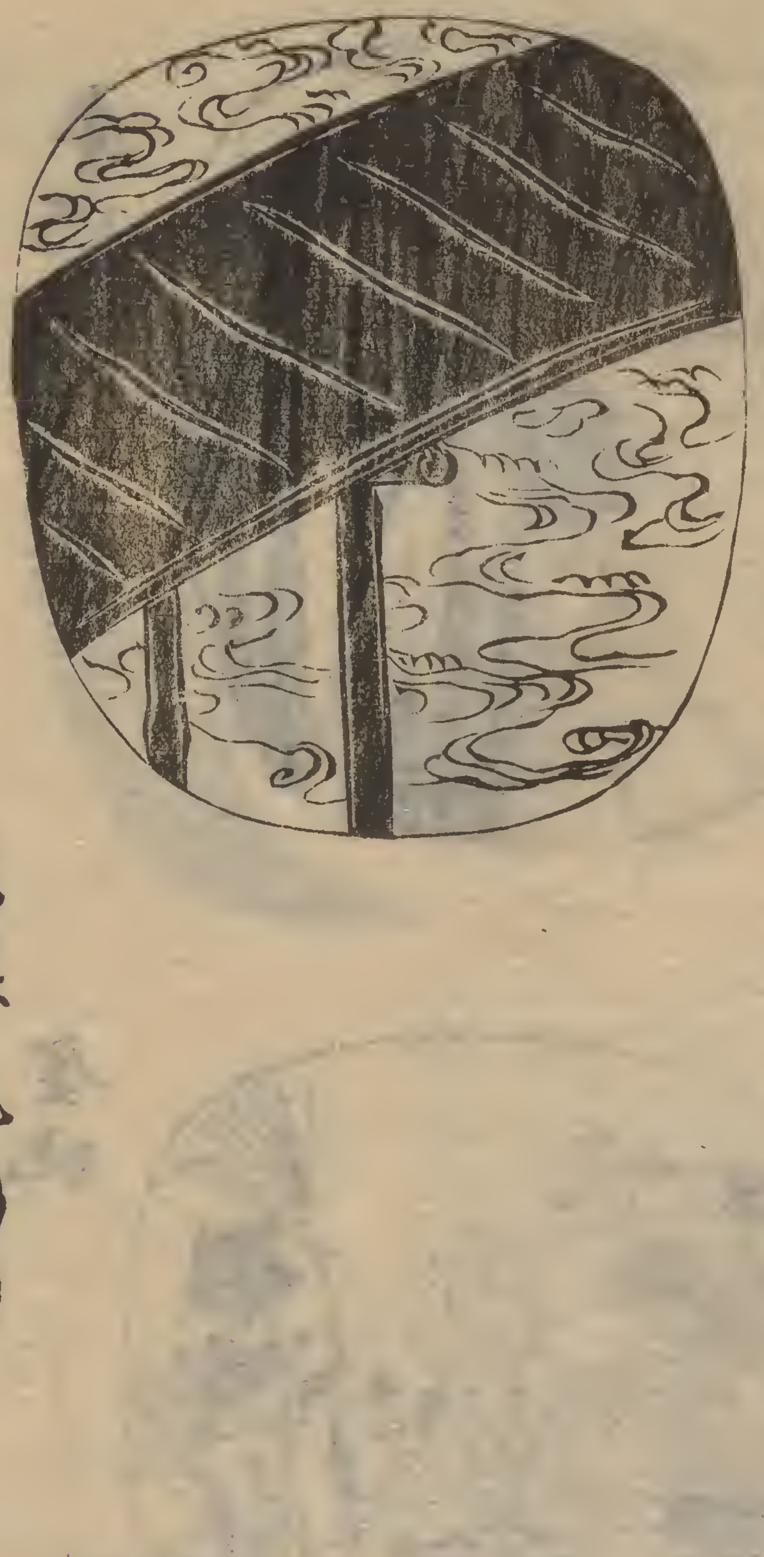
金地



金地

白地

金地



橋銀泥ぬり
川ふし
波群青

紙本淡彩

紙本うす彩色

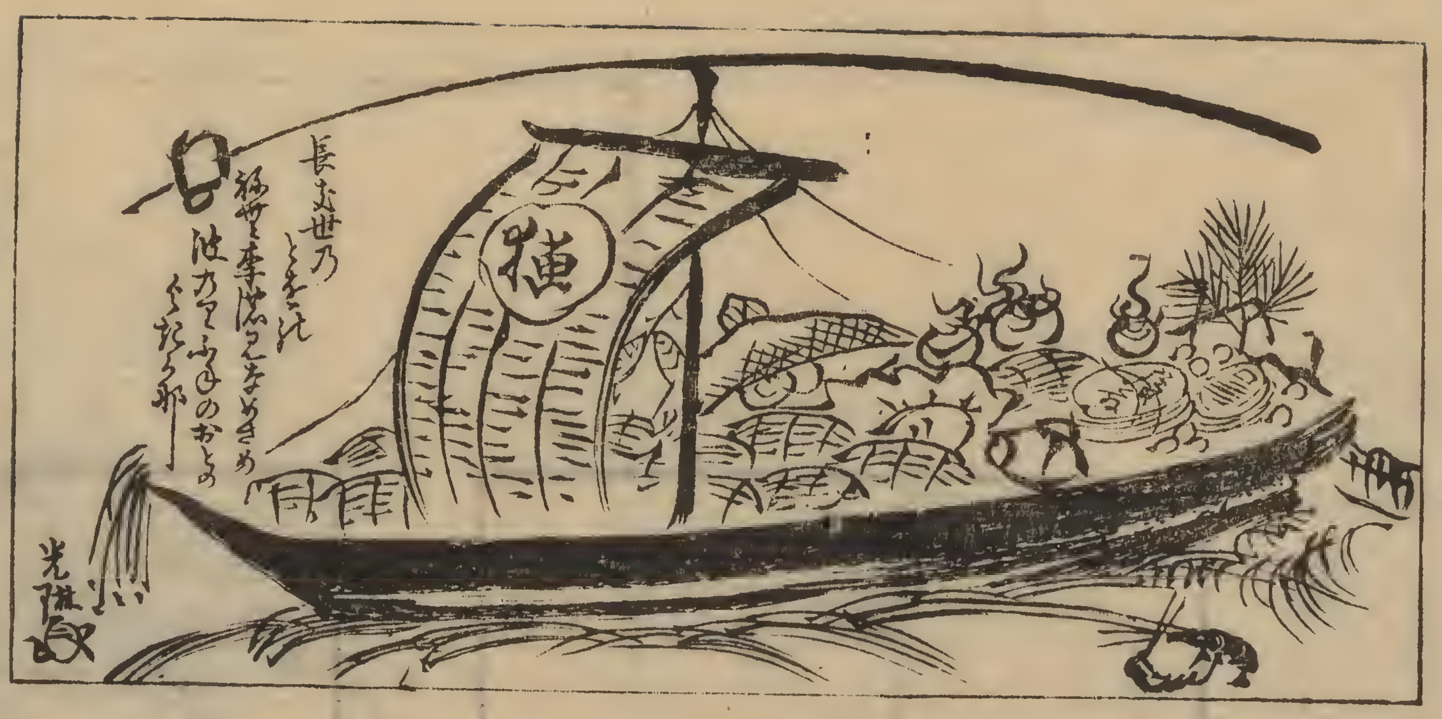
一 綾地花いろ
秋草ぬひ小袖うへ彩色 萩の分金銀泥

右うしろ

絹本
淡彩

絹本
墨画

紙本墨画



紙本各々淡く淡墨
松竹梅 雪月花

紙本
中淡彩
左右
墨画

紙本墨画
福禄寿

紙本墨画

紙本みゝ絵

金地六枚折一雙
四季草花彩色

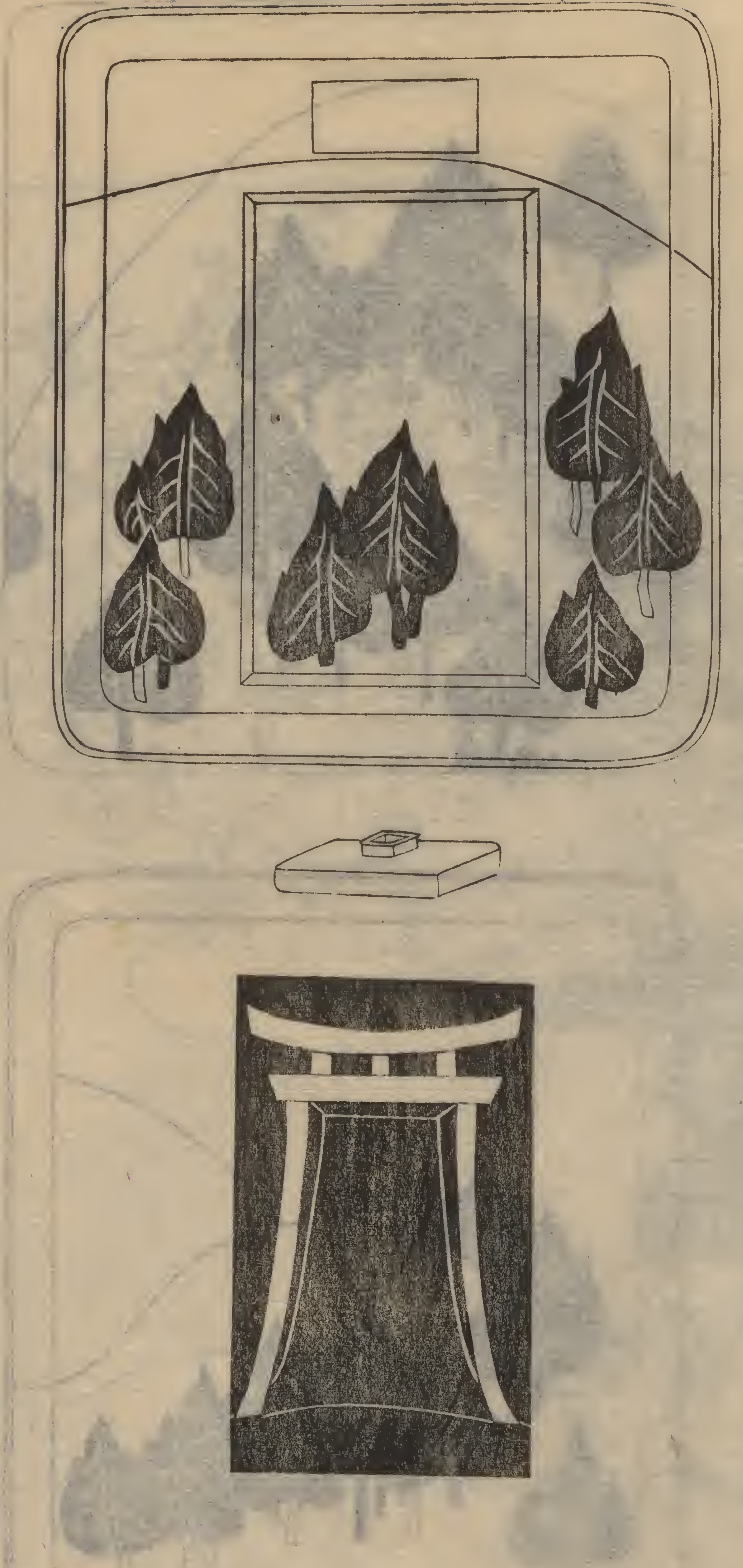
蒔絵三輪硯箱 ふた

丈九寸
横八寸

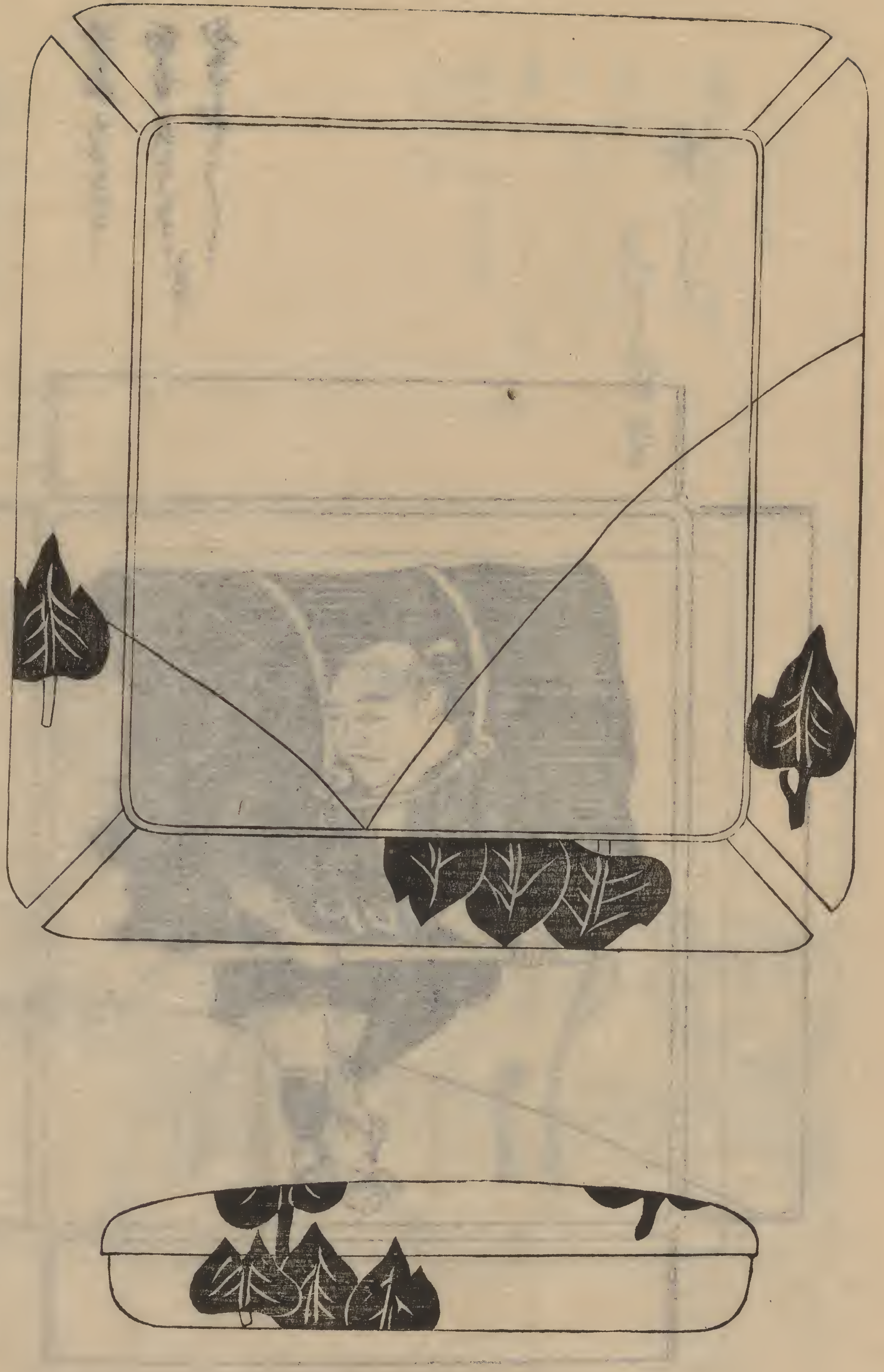
地黒金杉木のまわりこき青貝ちらし

身

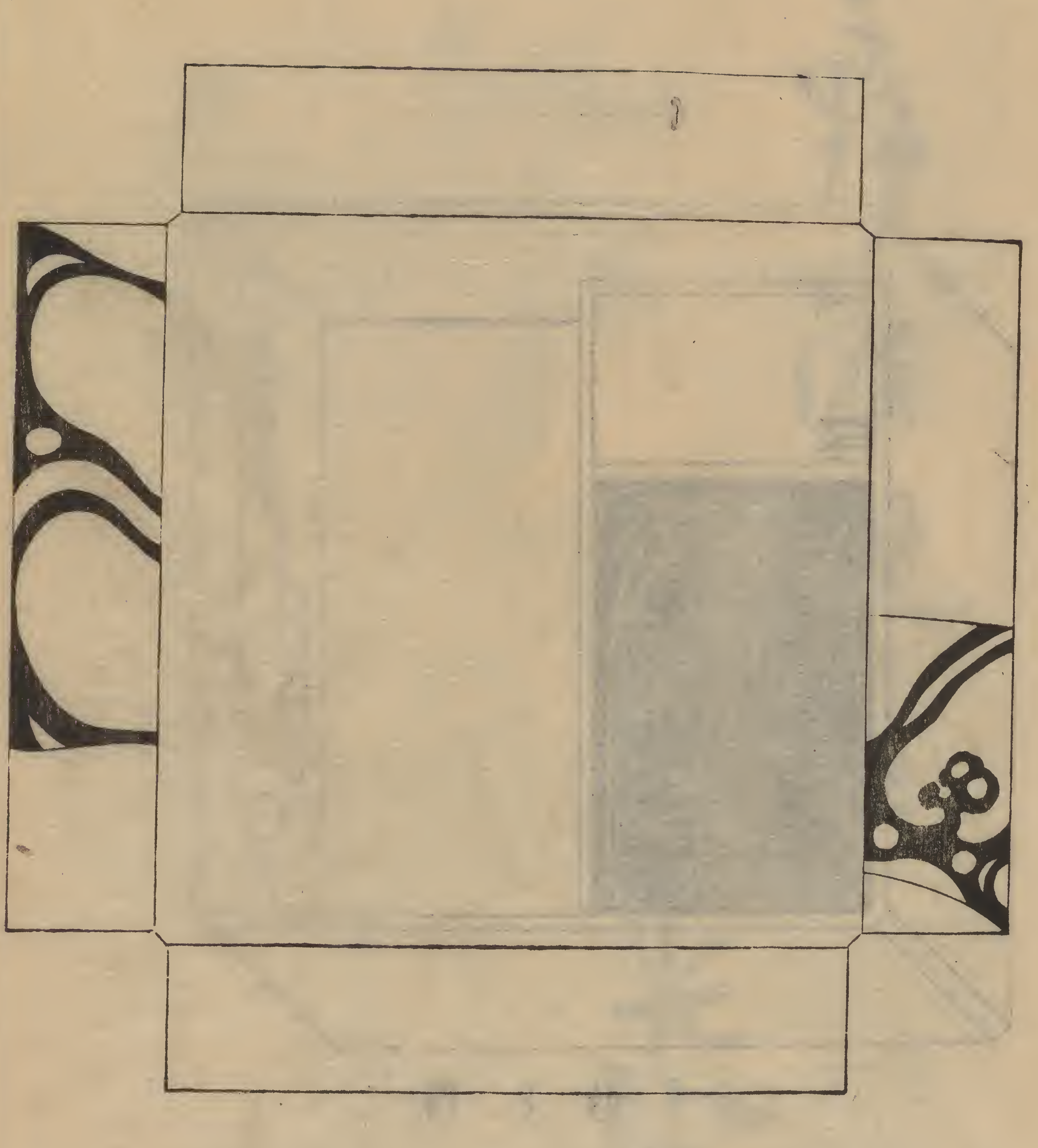
其一



其二



寿一



同硯箱

地熟金
衣青貝菱金
筋黒くゝりすし金
さしぬき青貝紋金
馬湯くゝあてぬき
とも金
波青金のくへ銀

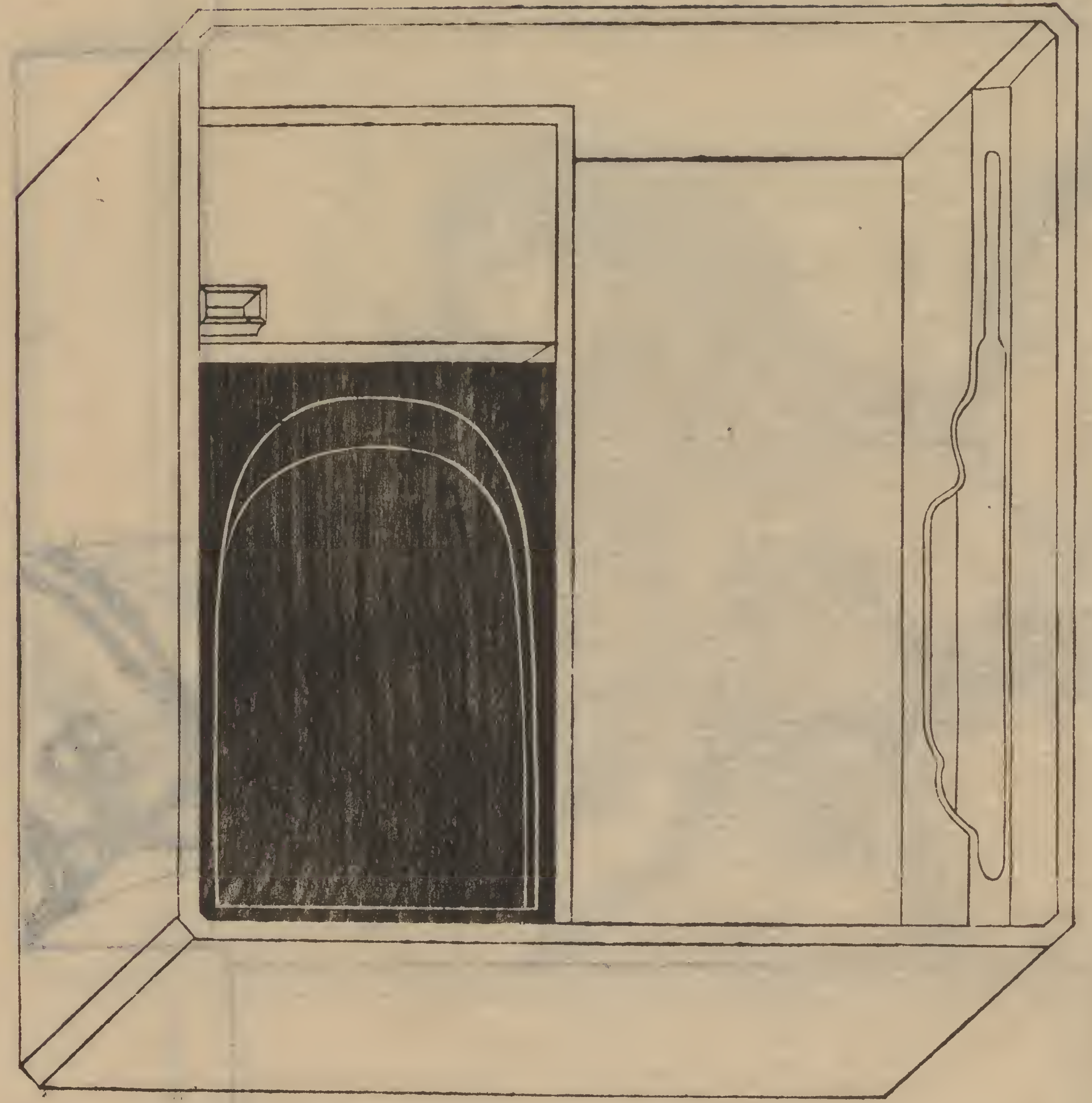
玉縁也
寸法
丈八寸
横七寸

右箱書付

佐野渡硯筥

青ゝ光造

其二



内之形

金地二枚折
屏風一双
極彩色

法橋光琳

彫工 清水柳三